

論文の内容の要旨

論文題目 知覚経験の概念性と非概念性

氏名 小口峰樹

本論が主題とするのは、知覚の哲学において 1990 年代以降主要な対立軸の一つを構成している、知覚経験に関する概念主義と非概念主義のあいだの論争である。非概念主義者は、知覚経験の内容は信念や思考とは異なり概念的に構造化されていない非概念的なものであると主張する。これに対してマクダウェルやブリューワーといった概念主義者は、知覚経験の内容は信念や思考と同じように構造化された概念的なものであると考える。マクダウェルやブリューワーの論証においては、われわれが経験的信念を有していることを前提とした上で、それが成立する可能性の条件を探求することで知覚経験が概念的な内容をもつと論じられてきた。この意味で、概念主義を支える主要な議論は超越論的論証を通じて与えられてきたと言える。しかしながら、こうした超越論的なタイプの論証に対しては、それが知覚経験の「状態における概念性」を示すのみで「内容における概念性」を論証するには届いていないという指摘がなされている。本論ではこうした批判に応答するため、知覚に関する認知科学や神経科学の成果を取り込みながら、知覚内容の概念性に関する自然主義的な論証を構築する。そうした自然主義的な論証は、知覚経験の形成過程に着目することで、知覚内容の概念性に対するより直接的な論拠を与えるものである。

このように本論は「概念主義に対する超越論的な論証の批判的検討と、それを受けての自然主義的な論証の構築とその擁護」を目的として設定する。この目的を達成するために、本論は以下のように全八章の構成に従って展開される。

第一章ではまず、「内容」や「概念」など本論に登場する基本用語の明確化を行い、概念性の諸基準（合成性、認知的意義、指示決定性、力からの独立性）を定める。さらに、非概念主義の代表的な論者たちがどのような論拠によって非概念主義を支持しているのかを概説する。

第二章と第三章では、概念主義に対する超越論的な論証を展開した代表的な論者であるマクダウェルとブリューワーの議論を取りあげ、それぞれについて詳細な検討を行う。

第二章ではマクダウェルの概念主義について論じる。マクダウェルはその哲学の中心的な課題を「心と世界の関係性に関する近代哲学に特徴的な不安」を治療することにあると述べる。その不安とは、「経験は一種の自然現象であり、それゆえ理由の論理空間のなかに位置をもたないとすれば、経験的信念は成立不可能なのではないか」というものである。この不安に対するマクダウェルの処方箋は、「知覚経験は自発性（＝概念能力）と受容性（＝感性能力）の協働として成立するのであり、それゆえ理由の論理空間のなかにその座を占めることができる」というものである。この見方によれば、知覚経験は概念能力が受動的に現実化された状態であり、この概念能力によって判断とのあいだに理由付与関係を結ぶことで、主体に対してその内容を受け入れるための合理的な権利を付与する。本章ではさらに、近年のマクダウェルによる命題説から直観説への移行に対して批判的な検討を行う。

第三章ではブリューワーの概念主義について論じる。第二章で取りあげたマクダウェルの議論は、概念主義の論証にとって取り組むべき次の二つの問いに対して十分な答えを与えるものではない。それらの問いとは、（１）知覚経験から判断に与えられる合理的制約はなぜ主体にとってアクセス可能な理由でなければならないのか、（２）なぜそうした合理的制約を与える項は概念的 content をもつものに限られるのか、というものである。ブリューワーによる論証は、これら二つの問いに対する応答を行うことで、マクダウェルの立場を継承しつつ、それを補完するものであると解釈できる。本章では、こうしたブリューワーの論証を批判的に検討する。さらに、概念主義内部における全体説と部分説の対立を取りあげ、それらの欠点を克服するものとして「階層的な概念主義」という立場を素描する。

第四章では概念主義／非概念主義論争の内部におけるさらなる対立軸として内容説と状態説という区分を取りあげる。一部の論者によれば、従来の論争ではこれらの区別が曖昧なままに置かれており、それによって議論の正否を判定する際に無用な混乱が生じている。すなわち、内容（非）概念主義を支持するとされる論証の一部は、実際には状態（非）概念主義を支持するものでしかない。本章では、これらの組み合わせから生じる二つの混成的な立場（内容概念主義＋状態非概念主義および内容非概念主義＋状態概念主義）の整合性について検討し、内容概念主義を擁護するためには、対応する状態説を介してではない直接的な論証を与えることが必要であるという指摘を行う。さらに、こうした考察を踏まえた上で、超越論的論証は内容非概念主義が成立する可能性を十分に排除するものではない、という否定的な結論を導く。

第五章では、こうした否定的な結論を乗り越えるために、自然主義的なアプローチから

新たな概念主義の描像を提示し、内容概念主義に対する直接的な論証を構築する。内容概念主義によれば、知覚経験が備える内容は命題的に構造化された概念的なものである。知覚経験が命題的な構造を獲得するためには、(1) 最低でも主部と述部に該当する分節形式を備えていること、(2) その構造の構成要素が合成性という特徴を有していること、の二つの条件を満たさなければならない。本章では、知覚経験の形成過程においてこれらの条件を満足する内容を与えるメカニズムとして、ピリシンの「視覚的指標理論」とマッテンの「感覚的分類理論」という二つの理論に着目する。

視覚的指標理論によれば、感覚システムの初期過程には複数の対象に対して同時に指標を配分し、それらの数的同一性を追跡するという選択的注意のメカニズムが備わっている。指標が配分された対象に対しては、それがもつ諸性質を格納していく「対象ファイル」が作成される。この対象ファイルは、視覚的对象が例化している性質を述定するための主部として機能することで、知覚に命題的な構造を与える役割を果たす。これは上述の(1)の条件を充足するものである。さらに、感覚的分類理論によれば、感覚システムの初期過程には入力刺激を並列的に処理する分類メカニズムが備わっており、諸性質を感覚クラスとして処理することで、対象ファイルへと収納されるべき内容を生み出す。これらの分類された諸性質は、視覚的指標の働きによって形成された対象ファイルのもとへ統合されることで、他の諸性質と合成可能なものとしてコード化されることになる。これは上述の(2)の条件を充足するものである。これらの理論を通じて描き出される描像を本論では「自然化された概念主義」と呼ぶ。

続く第六章では、この自然化された概念主義に対してその擁護を行う。はじめに、自然化された概念主義における知覚経験が概念性の四つの基準を満たすことを論じ、続いて、第一章で概説した非概念主義を支える七つの論点に対して、自然化された概念主義の立場からそれらすべてに応答するという論を論じる。さらに本章では、「知覚経験において何が主部の役割を演じるのか」という問題に対する対象基盤説と位置基盤説の論争を取りあげ、前者を擁護するための議論を展開する。

自然化された概念主義によれば、視覚的指標の配分や感覚的特徴の分類は初期知覚過程に属する前意識的なメカニズムの働きである。だとすれば、自然化された概念主義は概念的内容がどのようにして意識経験の内容となるのかを説明しなければならない。第七章では、視覚的指標がある種の注意のメカニズムであるという点に着目してこの問題に対する検討を行う。プリンツは注意と意識の関係性に関して「AIR 理論」と呼ばれる新たな見方を提唱している。意識の AIR 理論は、「意識の担い手となりうるのは階層的な知覚処理過程のうちで中間レベルに属する表象のみである」とする中間レベル説と、「中間レベルの表象が意識的になることにとって、それが注意を向けられることが必要十分である」とする注意制御説とによって構成される。本章ではこの注意制御説に対する批判的な検討を通じて、「選択的注意は無意識的な情報や背景的な意識的情報を前景化するという役割を果たす」というテーゼを析出し、このテーゼによって概念的内容と意識経験の内容の距離が埋めら

れることを論じる。さらに、第三章で素描した階層的概念主義に立ち戻り、本章の議論を踏まえてその精緻化を行う。

第八章では、知覚経験と身体行為との関係性をめぐる論争を通じて、知覚システム全体における概念的 content の位置づけを検討する。知覚と行為の関係性をめぐっては、現在、「二重視覚システム仮説」と「感覚運動アプローチ」という二つの主要な見方が存在している。前者は知覚と行為の機能的分離を強調するものであり、後者はそれらの相互依存性を強調するものである。これら二つの理論のうち、本論の擁護する自然化された概念主義と親和的なのは二重視覚システム仮説である。この点を踏まえ、本章では感覚運動アプローチに対してそれが経験的基盤を欠いているという指摘を行うとともに、二重視覚システム仮説に対する「現前性という感覚を説明できない」という批判に対して応答を行う。以上の議論は二重視覚システム仮説の優位を示すものであり、それを通じて本論が提示する自然化された概念主義にさらなる支持を与えるものである。

以上の全八章を通じて、本論は概念主義に対する従来の超越論的な論証の限界を確定し、その限界を克服する自然主義的な論証とその擁護を展開する。本論で展開される議論が妥当なものであるとすれば、知覚経験の概念主義は従来の陥穽を乗り越える堅牢な理論として再構築されることになるだろう。